

のようです。

私(筆者)なども野球を賞えたのは、尋常科の三、四年の頃(明治四十二、三年頃)であつたが、その頃には既にミットもグローブもあつた。あつたといつても現在のようになど派なものではない。少年用には皮製でなく布製のものもあつた。学校には備品として皮製のミットとグローブを一揃え揃えてあつて、高学年の生徒が交替で使つていた。めつたに触れることも出来ないう大卒まであつたから、布製のものを買つてもらつて得意そうに学校へ持つて来る子もいた。ボールは今使つていゝ硬球と大差はなく、少し細目で堅い皮ボールであつたが、打球が今のボールのように速く飛びなかつた。皮ボールはその價目貴重品のように大事にして、縫ひ目の糸が切れると早速細い緒糸で縫つたものだ。今の軟式野球に使用するゴム製のボールは大正の末期頃から使い初めたのであるから、この当時、尋常科の児童でも今の硬球と殆んど変わらないこの皮ボールを使つていたのである。バットは既製品のものもあつたが手製のものが多かつた。一級口重く、重いバットでないといふ打球が遠く飛ばないと言はれていた。捕手のかぶるマスクもあつたが今のようない型ハモとは違ひ、針金を組合せて作つたものであつた。それで要用な先生は手製かマスクを作つておられた。捕手がプロテクターと脛当をつけるようになったのは、ずつと後のことである。

(余自小誌)

鶴屋城ニハ丸がどこか、知らん方がある。ニハ丸は山頂にある。三ハ丸の上の旗(元箱新張があつたという)の右よつと廣いところをニハ丸と呼んでゐるのを時々耳にする。とんでもないまちがひである。

研究

佐伯と國木田独歩 (四)

「小春」より

會員 山本 保

「小春」は明治三十四年三月に發表した作品(独歩三十一才)です。丁度七年前、ワーズワースの詩想に導かれて自然を愛し、弘たすら自然の世界に没入した佐伯時代を回想し、思慕して描いた佳作です。作品の一部を左に掲げます。

自分が最も熱心にワーズワース(詩集)を讀んだのは、豊後の佐伯にいた時分である。自分は(田舎教師)としてこの所に一年滞在していた。

自分は今、ワイ河(ワーズワース詩集)を讀んで、端なく思い起すは実にこの一年の生活及び佐伯の風光である。佐伯の地において自分教師といふよりも寧ろ生徒であつた。ワーズワースの詩想に導かれて、自然を學ぶところの生徒であつた。自分の眼底には、かの地の山岳、河流、溪谷、緑野、森林悉く鮮明に残つていて、我故郷の風物よりも幾倍の色彩を放つてゐる。なぞたらう!

「月光をして汝の逍遙を照らさしめ」、自分は夜となく、朝となく、山となく、野となく、昼となく、一年の歳月を逍遙に暮らした。「山谷の風を志に汝を吹

これら相重なる山山の谷間に住む生民を懐もざるを得なかつた。

(註) ワーグス又詩集は、独歩が佐伯に来る前年、すなはち再上京間もない明治二十五年九月に入手したもので、それ以来独歩の大切な伴侶となり、殊に佐伯時代は一日として手離すことがありませんでした。

元越山(五八二)に登つた時の様子を描いた独歩の日記を左に掲げます。(田がまへかいによる)

(第一回) 元越山に登る記 明治二十六年十一月五日

早朝家兄と共に約束して、飄然(安本師)寓居を出立したるは、元越山へ登らん為なりき。時に天晴れ、碧空拭ふが如く、蒼は高く蒼天に舞ひ、朝氣肌に徹して爽快言ふ可からず。

船頭(浜丁)河岸に達したる時、突然群集の叫より、余を呼ぶ者あり。顧みれば一個の年老なればと送りげなる男なりき。彼は曰へり。「木立(木立村)にお越しに由」と。余等は何を以て彼のかく云うかを解せざれど、只然りと答へたり。(船頭)彼は余等を河岸に繋ぎたる河船の一に導きぬ。始めて其渡船なるを知りたりき。船中には既に二人の男女あり。

坂上茶店(浦代峠)あり。中に二人の女あり。試て道を問ふ。婦曰く「道おれど悪しくして上り難し。我道日絶頂に上らんとて行き左れど途にして帰れり。殊に貴客等不案内の道なれば到底此道よりは上り難けん。坂を下れば能き道あり」と。

されど余等再び坂を下るを好まず強ひて道を問ひ上る。数十歩ならずして果して丈を没せんばかりの羊齒茂りて進むべ極なし。されど強性まけん急に駆られて

野猫の如く突進し、漸くにして雜樹疎なる所に出づ。

首を掲げて望めば既に豊後富士は北天に聳え、前山の後き所より蒼々たる大海の孤片とも見ると得て益々

絶頂の壯觀を思はしむ。されど道愈々悪しくして気衰へ、又進むの勇なし。せめて興奮劑にもと換飯を飽食し、猛進する元氣を鼓して攀ぐ。丈余の灌木(低木)繁りて荆棘(へいばら)遮りて道を弁せず。僅かに野獸の徑を探つて行く。其行くや恰も土着の如く頭を以て樹木を排して突進するなり。是に依て帽子衣服手足の嫌なく、樹枝の爲かき破らる。倒るる又幾度、

頂上に達するや否や漂渺たる大海忽焉として双眸望に入りたる剎那、高遠なる大觀に對したる瞬間、一言に能はざる感に打左れ、殆んど洋並せん計りなりき。太平洋は東南に闊き蒼々として限りなく水平線半円となせり。俯せば美なる入江あり、山を屏ひたる二三の漁村は夕陽に半面を照らされ、白帆点々海水に映ずる等一幅の好画我左るを失はず。

首を擡げて東方を望めば四回地は大蛇の伏したる如く蜿々として連なり、南端遙かに大洋中に突出せり。顧及て西南に向へば凸凹少なき日向の海岸は一大変形となして、其南端又太平洋中に烟の如く波し去れり。日肥(日向)肥後)の連山は藻々として重畳又重畳。

茫々三千歳綫多の治乱興敗起り、幾億万人の人は生れ幾億万人の人は起り。されど山川草木は寂々として語らず。水は黙々と流る、山は頑として峙ち、只歴史の之を伝ふるあるのみ。

此を眺むれば、豊後富士(五八四)は元として群山上に聳え、佐賀關は遙かに佐田の長嶺と相對し之を見越して、雲が山か水平線上に横はるは故郷の青山なり、嗚呼故郷、故郷!

幾度か故郷に向ひて叫べる。彼

閑翁へ」といふ見出しで次のような記事が掲載されてい
ました。

鶴見崎は、豊後水道に突き出た鶴見半島の突端にあ
り、最近はいそ釣りの空庫として知られている。

半島全体が高さは僅に二百メートルの断崖が絶壁、尾
根が鶴見所（北側）と米水津村（南側）の境界になっ
ている。半島の先端からの展望は、前方が豊後水道と
隔てて四國の山々、右が太平洋、左に水の子島をほじ
めとする大小の島々が点在する波々静かな佐伯湾があ
り、全國有数の景勝地。

鶴見スカイラインの構想は、佐伯市と米水津村を結
ぶ県道の中間点、市内水立の溜池左から灘山（三四八坪）
の頂上を登り、ここから尾根依いに半島の先端までを
縦走する幅六メートル、延長二十キロメートルのドラ
イブウエーを建設しようという計画。

尾根には昔から二メートル幅の小道があり、これに
沿って拡張することになる。

途中には、國木田独歩の作品にも出てくる元越山へ
のハイキングコースや、海水浴に適した米水津村間越
に降りるコースも設け、間越にはユースホステルが因
氏宿舎を建設、海水浴場や、亜熱帯植物の茂る周辺の
島々をめぐる水中翼船や、蒲江町屋形島のサンゴ礁見
物の観光船基地も考えている。

半島の先端部は旧日本軍の坑道陣地があり、ト
ナリ式監視しようも残っており、ここに展望台を建設
する。

真珠イカダが並ぶ、山の斜面にはミカン園がある。

鶴見町耳賀、梶寄、中越などには、かつて尾根の耕作
者たちが作ったイノシシよけの石がぎが万里の長城を

思わせるように築いてあり、丹波はかくれキリシタン
の遺蹟がある。

すばらしいこの自然を生かして、佐伯地方観光開発
の一つの拠点としてようと計画している。佐伯市、南海
部郡地域開発促進協議会（会長、高山善吉佐伯商工会議所会
頭）がその音頭をとっている。

氏後子研究の大家柳田回男の「海南小記」（大正九年記行、
の一部を掲載いたします。ご鑑賞下さい。

保上の山（保戸島）に登ると佐伯湾を隔て、南に鶴
見崎に接した大島と云ふのが指示される。保上から移
住したと云ふ旧家なども有るそうだ。此の入海では大
入島が最も大きく、幾つかの網代と美しい清水がある。
娘たちが帆を操って毎日町（佐伯町）に往來している村
（大入島村）である。又人は住まざして耕地ばかりの島
もある。

中浦の沿岸を東へ進んで、大島（元浦海岬）の瀬戸を通り板ける
と、鶴見の鼻から芹崎（蒲江町西野浦）までの間は、多く
の小島を無人島が連つて居る。地の黒島と沖の黒島へ
米水津村との中を往くが、沖黒島の方には蒲葵が生え
て居る。

蒲江の港の口には島が又二つあって（屋形島と深島）
その遠い方の深島には、人も住む学校（現在の深島小中
学校）もあり、蒲葵の林も有ると云ふ話であつたが、そ
う夕方になつて其風情を見ることが出来なかつた。

（註）

米水津村議會議員と村役場職員約二十人、この
ほど四國博を記念して県道浦代峠に桜の苗木四百本
十本を植えました。

研究

浦代峠の佐伯市水立側から米水津村浦代峠までの約六キロは、数年前まで桜の並み木があり、シーズンには花見客でにぎわっていました。戦前は、すばらしい盛況をみせていました。しかしこの桜も病虫害で枯れたり、折れるなどして昔の面影はありませんでした。

昨年（昭和四十四年度）、この浦代峠の全面改修（新トンネル開通）が行われましたが、村は観光開発と合せて、再び桜の名所にしようとして、三年生の吉野桜を植えました。今から楽しみにしています。

先日、佐伯——米水津村竹野浦、宮ノ浦間のドライブを試みましたが、県道も舗装されておき、すばらしい観光コースの一つです。

（つづく）

佐伯の港はどんな働きをしているか

——主として米穀の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校 教諭

司校郷土誌クラブ顧問

本会会員 市野瀬

仁

第二章 佐伯港

第二節 その社会的環境（つづき）

ハ、旅客船

旅客船は佐伯市、南延部郡内の離島を含む定期連絡船と、夏季に利用する湾内観光船が加わっている。即ち大島、梶寄、中浦、松浦一帯の鶴見地区。日向泊、塩内、荒網代、片津等へ大入島地区、蒲戸方面の上浦地区である。昭和四十四年度の乗降人員は十八万二千五十五人で、一日平均約五百人となつてゐる。これは国鉄の駅に例をとると、大体直川駅（五四〇人）よりやや少ない。大重要港湾の選定基準の②項目の一部に「最近三年間の乗降旅客数が、年平均十万人をこえるもの」とある点にも該当するわけである。

地域別の利用人員は、大入島が他地域の十倍を占めて、大島と共に連絡船の必要は、陸上交通の可能性のある地域とは違つて、必要かくべからざるものである。また大入島にいたつては距離も短かく、客数も多いので回数が多くなるため、セメントや木材運搬船の横断には十分の注意が必要である。この点向岸や津久見の港に比べて、船路

(第1表)

事業状況集計表 (54.10.1)

九州海運局大分支局佐伯出張所管内

	佐伯地区	蒲江	旅客	施網	其他	計
船隻 10人以内	4	1		12	4	21
10人以上	88	19	15	1	5	130
計	92	20	15	13	9	151
乗降人員	97	25	22	29	9	184
雇用船隻	44	1	98	26	213	850
非雇用船隻	96	37	27	1	10	175
計	537	135	53	214	82	1,025

か交又して
お小問題点
とほらんで
いふと見ら
れる。今更
で大橋車力
あつたこと
は聞いてい
ないが、同
じ佐伯港の
中でも葛港